京機短信　特別号

KEIKI short letter

No.359 2021.09.05

京機会（京都大学機械系同窓会）tel. & fax. 075-383-3713
E-Mail:　jimukyoku@keikikai.jp
URL:　http://www.keikikai.jp　編集責任者　吉田英生

京都大学名誉教授 **岐美（みちよし） 格（いたる）** 先生（S23/1948卒）の論文
「枕草子と徒然草における自然」（松江高専研究紀要、1993）
を、特別号としてお届けします。

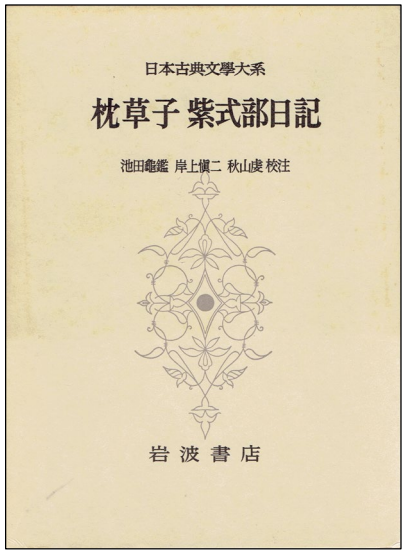
（1926.6.27 – 2021.6.7）

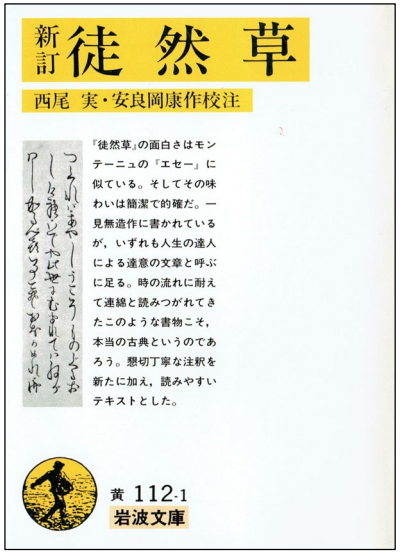
ご略歴（ご専門：熱工学）

1953　機械工学科講師
1956　機械工学科助教授
1958　工学研究所（現エネルギー理工学研究所）に配置換え
1961　原子核工学科教授
1989　名誉教授
1989 – 1995　松江工業高等専門学校 校長

<u>枕草子</u>
「日本古典文學大系19、枕草子　紫式部日記」池田龜鑑・岸上慎二・秋山虔校注、岩波書店、1972年12月による。

<u>徒然草</u>
「新訂徒然草」西尾実・安良岡康作校注、岩波書店（岩波文庫）1987年8月による。





本論文は「松江高専研究紀要　第28号（平成５年３月）」から、松江工業高等専門学校と岐美格先生のご遺族のご了解を得て、原文に忠実に、かつ新たに４色刷りで編集したものである。
なお、ルビと注だけは行間でなく（　）で本文中に挿入したため、行の長さが不揃いになっている。

令和三年八月六日

京都大学機械系同窓会　京機会

枕草子と徒然草における自然

岐美　格

Nature Described in Makura-no-sōshi and Tsurezuregusa

Itaru MICHIYOSHI

第一章　緒　論

この論文は、枕草子と徒然草に書かれている自然について、自然を見つめる「め」や、自然に対する「こころ」を浮きぼりにしつつ、考察を試みようとするものである。

両者とも、旧制中学校の教科書に掲載されていたり、旧制高等学校の受験参考書に取り上げられていたりして、いずれも断片的に読んだことのあるもので、その当時は、その意義など深くも考えなかったのであるが、五十年も経て今日これを全部読んでみると、自然科学や技術を学習し、その発展を目的として研究をしてきた者にも、昔の日本人の自然に対する「め」や「こころ」が、十分に理解でき、昔とかわらず今でもそうであるし、今後もそうありたいと思うことが、いろいろ読みとれるのである。それが日本の文化というのであれば、その文化のもとで、将来の科学技術の発展を期待すべきであろう。現在のように科学技術の発達した世の中においても、生徒、学生らが、その一層の発展に寄与しようという夢を持つことが望まれる。

人間の大昔からの技術の発達の過程において、自然とのかかわりのもとで偶然に知ったことが、その後の技術を生み出し、文明・文化を築いてきた。さらに自然科学は、先行した技術のあとを追う形で、西欧において発達してきた。近代においてわが国は、西欧の文明をとり入れたが、昔は中国や朝鮮半島から技術や宗教などをとり入れた。

第二章　枕草子と徒然草における自然

一〇〇一年に、ほぼ完成した（注１）とされる清少納言の枕草子の一段には、日本の四季についての文章（注２）が、つぎのように書かれている。

春はあけぼの。やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏はよる。月の頃はさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすのねどころへ行くとて、みつよつ、ふたつみつなどとびいそぐさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いとちひさくみゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音むしのねなど、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいとしろきも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火もしろき灰がちになりてわろし。

はる、なつ、あき、ふゆの語源にはいろいろの説がある（注3）ようであるが、夏は熱気で暑く、冬は冷えて寒いことは、誰もが心得ていることであって、一一八段にも、「冬は、いみじうさむき。夏は、世に知らずあつき。」とあるけれども、ここには、日が落ちた夏の夜のことと、寒い冬には炭の火のふさわしいことしか書いていないのが心にくい。そして一千年後の現代でも、一段に書かれていることに郷愁と共感を覚えるのは、日本人の自然を見る「め」や自然に対する「こころ」の持ち方が、ほとんど変わっていないことを示すのではなかろうか。

つぎに一九二段と、二九八段をそれぞれとりあげよう。

いみじう暑き晝中に、いかなるわざをせんと、扇の風もぬるし、氷（ひ）水に手をひたし、もてさわぐほどに、こちたう赤き薄様（うすやう）を、唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて、とり入れたるこそ、書きつらんほどの暑さ、心ざしのほど浅からずおしはかられて、かつ使ひつるだにあかずおぼゆる扇もうち置かれぬれ。

節分違（せちぶんたがへ）などして夜ふかく帰る、寒きことといとわりなく、おとがひなど落ちぬべきを、からうじて来着きて、火桶ひき寄せたるに、火のおほきにて、つゆ黒みたる所もなくめでたきを、こまかなる灰のなかよりおこし出でたるこそ、いみじうをかしけれ。

また、ものなどいひて、火の消ゆらんも知らずゐたるに、こと人の来て、炭入れておこすこそいとにくけれ。されど、めぐりに置きて、中に火をあらせたるはよし。みなほかざまに火をかきやりて、炭を重ね置きたるいただきに火を置きたる、いとむつかし。

いまでこそ、家庭にクーラーやエアコンが設けられているが、夏は団扇、よくて扇風機、冬は火鉢、よくてストーブを使った生活が、ついこの間まで続いていたし、私の家では、いまも扇風機とストーブであり、この二つの段の文章の描写があまりにもそのとおりなので、驚きと、懐かしさとともに感心せずにはいられない。ただし、団扇や、扇子や、冷水（井戸水）や、火鉢や、炭火や、灰についての経験がなくて、実感できない人々が居るのではなかろうかとあやぶまれる（注4）。

夏は暑く、冬は寒いことは当然だとして、そのもとでの生活のあり方が、たとえ宮廷のことを書いたとしても、住居や日常のことなどの

文章の中にあらわれている。そのいくつかを、つぎに列記しよう。

三六段

七月ばかりいみじうあつければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月の頃は寝おどろきて見いだすに、いとをかし。やみもまたをかし。有明、はたいふもおろかなり。

いとつややかなる板の端ちかう、あざやかなる畳一ひらうち敷きて、三尺の几帳、おくのかたにおしやりたるぞあぢきなき。端にこそたつべけれ。おくのうしろめたからんよ。云々。

二二四段

いみじう暑きころ、夕すずみといふほどの、物のさまなどおぼめかしきに、男車（をとこぐるま）の前驅（さき）追（お）ふはいふべきにもあらず、ただの人も、後（しり）の簾（すだれ）あげて、二人も、一人も、乗りて走らせ行くこそすずしげなれ。まして、琵琶かい調べ、笛の音（おと）など聞こえたるは、過ぎて往（い）ぬるもくちをし。さやうなるに、牛の鞦（しりがい）の香（か）の、なほあやしう、嗅ぎ知らぬものなれど、をかしきこそもの狂ほしけれ。

いと暗う闇なるに、前（さき）にともしたる松の煙の香の、車のうちにかかへたるもをかし。

七六段

内裏の局（つぼね）、細殿（ほそどの）いみじうをかし。上（かみ）の蔀（しとみ）あげたれば、風いみじう吹き入りて、夏もいみじうすずし。冬は、雪・霰などの、風にたぐひて降り入りたるもいとをかし。せばくて、わらはべなどののぼりぬるぞあしけれども、屏風のうちにかくしすゑたれば、こと所の局のやうに、聲たかく笑（ゑ）わらひなどもせで、いとよし。晝なども、たゆまず心づかひせらる。夜はまいてうちとくべきやうもなきが、いとをかしきなり。

沓の音、夜一夜聞ゆるが、とどまりて、ただおよびひとつしてたたくが、その人なりと、ふと聞ゆるこそをかしけれ。いとひさしうたたくに、音もせねば、寝入りたりとや思ふらんとねたくて、すこしうちみじろぐ、衣（きぬ）のけはひ、さなりと思ふらんかし。冬は、火桶にやをら立つる箸の音も、しのびたりと聞ゆるを、いとどたたきはらへば、聲にてもいふに、かげながらすべりよりて聞く時もあり。云々。

一八一段

雪のいと高うはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。

また、雪のいと高う降りつもりたる夕暮より、端近（はしちか）う、おなじ心なる人二三人ばかり、火桶を中にするゑて物語などするほどに、暗うなりぬれど、こなたには火もともさぬに、おほかたの雪の光いとしろう見えたるに、火箸して灰など掻きすさみて、あはれなるもをかしきもいひあはせたるこそをかしけれ。云々。

二九九段

雪のいと高う降りたるを、例（れい）ならず御格子（みかうし）まゐりて、炭櫃（すびつ）に火おこして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、香爐峯の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾（みす）を高くあげた

れば、わらはせ給ふ。
人々も、「さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、此の宮の人には、さべきなめり」といふ。

三〇二段

十二月廿四日、宮の御佛名の半夜（はんや）の導師聞きて出づる人は、夜中ばかりも過ぎにけんかし。
日ごろ降りつる雪の今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷（たるひ）いみじうしだり、地（つち）などこそむらむら白き所がちなれ、屋（や）の上は、ただおしなべて白きに、あやしき賤（しづ）の屋も雪にみな面隠（おもかく）しして、有明の月のくまなきに、いみじうをかし。白銀（しろがね）などを葺きたるやうなるに、水晶（すいさう）の瀧などいはましやうにて、長く、短く、ことさらにかけわたしたると見えて、いふにもあまりてめでたきに、下簾（しもすだれ）もかけぬ車の、簾をいと高うあげたれば、奥までさし入りたる月に、薄（うす）色・白き・紅梅など、七つ八つばかり着たるうへに、濃き衣（きぬ）のいとあざやかなる、つやなど月にはえて、をかしう見ゆる、かたはらに、葡萄染（えびぞめ）の固紋（かたもん）の指貫（さしぬき）、白き衣（きぬ）どもあまた、山吹・くれなゐなど着こぼして、直衣（なほし）のいと白き、紐を解きたればぬぎ垂れられ、いみじうこぼれ出でたり。指貫の片つかたは軾（とじきみ）のもとに踏み出（いだ）したるなど、道に人あひたらば、をかしと見つべし。
月のかげのはしたなさに、うしろざまにすべり入るを、つねにひき寄せ、あらはになされてわぶるもをかし。「凛々として氷鋪（こほりし）けり」といふことを、かへすがへす誦（ず）しておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近うなるもくちをし。
着物や色彩について、女性特有のこまやかな表現が、他の段にも随所に見られる。そして二八一段、「指貫は　むらさきの濃き。萌黄（もえぎ）。夏は二藍（ふたあゐ）。いと暑きころ、夏蟲の色したるもすずしげなり。」、二八二段、「狩衣（かりぎぬ）は香染（かうぞめ）の薄き。白き。ふくさ。赤色。松の葉色。青葉。櫻。柳。また青き。藤。男はなにの色の衣をも着たれ。」、二八三段、「單（ひとへ）は　白き。日の装束の、くれなゐの單の袙（あこめ）など、かりそめに着たるはよし。されど、なほ白きを。黄ばみたる單など着たる人は、いみじう心づきなし（気にくわない）。練色（ねりいろ）の衣どもなど着たれど、なほ單は白うてこそ。」、さらに二八四段、「下襲（したがさね）は　冬は躑躅（つつじ）。櫻。掻練襲（かいねりがさね）。蘇枋襲（すはうがさね）。夏は二藍。白襲（しろがさね）。」とある。
ところで、いつの世の中にも、いろいろの人が居る。

一二二段

わびしげに見ゆるもの　六七月の午（むま）・未（ひつじ）の時ばかりに、きたなげなる車に、えせ牛かけてゆるがしいく者。雨降らぬ日、張り筵（むしろ）したる車。いと寒きをり、暑き程などに、下衆（げす）女のなりあしきが子負ひたる。ちひさき板屋（いたや）のくろうきたなげなるが、雨にぬれたる。また、雨いたう降る日、ちひさき馬に乗りて、御前（ごぜん）したる。人の冠（かうぶり）もひしげ、うへのきぬも下襲もひとつになりたる、いかにわびしかるらんと見えたり。夏は、されどよし。

一二三段

暑げなるもの随身（ずいじん）の長（おさ）の狩衣。柄（なふ）の袈裟。出居（いでゐ）の少将。色くろ

き人の、いたく肥えて髪おほかる。琴（きん）の袋。七月の修法（ずほふ）の阿闍梨（あざり）。日中の時などおこなふ、いかに暑からんと思ひやる。また、おなじ頃のあかがねの鍛冶（かぢ）。

そして、二八段に、にくきもの（いやなもの）について、つぎのように書いている。

なでふことなき人の、笑（ゑ）がちにて物いたういひたる。火桶の火、炭櫃などに、手のうらうち返しうち返し、おしのべなどしてあぶりをる者。いつかわかやかなる人など、さはしたりし。老いばみたる者こそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物いふままにおしすりなどはすらめ。さやうのものは、人のもとにきて、ゐんとする所を、まづ扇してこなたかなたあふぎちらして、塵はきすて、ゐもさだまらずひろめきて、狩衣のまへまき入れてもゐるべし。かかることは、いふかひなき者のきはにやと思へど、すこしよろしきものの式部の大夫（たいふ）などいひしがせしなり。

また、酒（注5）のみてあめき、口をさぐり、ひげあるものはそれをなで、さかづきこと人にとらするほどのけしき、いみじうにくしとみゆ。

また、「のめ」といふなるべし、身ぶるひをし、かしらふり、口わきをさへひきたれて、わらはべの「こふ殿（どの）にまゐりて」などうたふやうにする、それはしも、まことによき人のし給ひしを見しかば、心づきなしとおもふなり。云々。

さて、自然現象について、二五〇段に、「降るものは　雪。霰。霙（みぞれ）はにくけれど、白き雪のまじりて降る、をかし。」とあって二五一段に、雪、時雨・霰、霜が、二五二段に、日が、二五三段に、月が、二五四段に、「星は　すばる。ひこぼし。ゆふづつ。よばひ星、すこしをかし。尾だになからましかば、まいて。」として星が、二五五段に、雲がとりあげられ、をかしく、またあはれなるものが示されている。

さらに一九七段に「風は　嵐。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる雨風（あまかぜ）。」、一九八段に、「八九月ばかりに雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨の脚（あし）横さまにさわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿衣（わたぎぬ）のかかりたるを、生絹（すずし）の單衣（ひとへぎぬ）かさねて着たるも、いとをかし、この生絹だにいと所せく暑かはしく、とり捨てまほしかりしに、いつのほどにかくなりぬるにか、と思ふもをかし。暁に格子・妻戸をおしあけたれば、嵐のさと顔にしみたるこそ、いみじくをかしけれ。」、一九九段に、「九月つごもり、十月のころ、空うち曇りて風のいとさわがしく吹きて、黄なる葉どものほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、椋の葉こそ、いととくは落つれ。十月ばかりに、木立おほかる所の庭は、いとめでたし。」、そして二〇〇段に、「野分（のわき）のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。立蔀（たてじとみ）・透垣（すいがい）などのみだれたるに、前栽（せんざい）ども心くるしげなり。おほきなる木どもも倒れ、枝など吹き折られたるが、萩・女郎花（をみなへし）などのうへによころばひふせる、いと思はずなり。格子の壷などに、木の葉をことさらにしたらんやうに、こまごまと吹き入れたるこそ、荒かりつる風のしわざとはおぼえね。云々。」と書かれていて、観察のこまやかさが光っている。なお、せめておそろしきものとして二六四段に、「夜鳴る神」があげてある。

木（注6）については四〇段に、木の花については三七段に、草については六六段に、草の花については六七段に、それぞれめでたきもの、あはれなるもの、をかしきものがとりあげられている。一方、鳥については四一段に「鳥は　こと所の物なれど、鸚鵡、いとあはれなり。人のいふらんことをまねぶらんよ。云々。」とあり、異国の鳥のことが最初に出てくるのが面白い。さらに、四三段に虫のことが書いてあるが、蝿（注7）と蟻のことは、にくきものとして出てくる。また既に述べた二八段に、にくきものとして、蚊と蚤が出ており、「ねぶたしとおもひてふしたるに、蚊のほそごゑにわびしげに名のりて、顔のほどにとびありく。羽風さへその身のほどにあるこそいとにくけれ。」また、「蚤もいとにくし。衣（きぬ）のしたにをどりありきてもたぐるやうにする。」とある。どちらも、自分の経験を思い起こさせる文章であるが、作者の実感がもとになっているのであろう。

牛や馬はもちろん、猫、犬、ねずみ、鹿、蛇についての文章のほかに、「いみじうきたなきもの　なめくぢ。云々。」と二六三段にある。鶴は四一段に出てくるが、亀は出てこないし、また魚についても記述がない。「貝は　うつせ貝。蛤。いみじうちひさき梅の花貝。」と一本一六段にある。

海と船と、そして海女（あま）について、三〇六段に詳しい。風がひどく吹いて、いままでのどかだった海面が険悪になっていき、船に浪がかかる。そして、「思へば、船に乗りてありく人ばかり、あさましうゆゆしきものこそなけれ。云々。」と続く。これは、三〇五段の「うちとくまじきもの　えせもの。さるは、よしと人にいはるる人よりも、うらなくぞ見ゆる。船の路。」と同様の気持ちであろう。ついで、船のうち、屋形、小舟、はし舟（はしけ）について述べ、終りに

海はなほいとゆゆしと思ふに、まいて海女のかづきしに入るは憂（う）きわざなり。腰に着きたる緒の絶えもしなば、いかにせんとならん。男（をのこ）だにせましかば、さてもありぬべきを、女はなほおぼろげの心ならじ。舟にをとこは乗りて、歌などうち謡ひて、この拷縄（たくなは）を海に浮（う）けてありく、あやふくうしろめたくはあらぬにやあらん。のぼらんとて、その縄をなん引くとか。惑ひ繰り入るるさまぞことわりなるや。舟の端（はた）をおさえて放ちたる息などこそ、まことにただ見る人だにしほたるるに、落し入れてただよひありく男（をのこ）は、目もあやにあさましかし。

と書いて、男のやり方に呆れている。海女は貝はとるが、魚はとらぬであろう。魚をとる漁夫のことには、筆をそそる気持ちが湧かないのであろう。全体を通じて、前に述べたように貝についてはあるが、魚についての記述がない理由の一つは、そのあたりにあるのであろうか。既述の一九二段に出てくる暑い日の「氷（ひ）水」は、氷室（ひむろ）に貯めてあった天然の氷を使うしかすべのなかった当時としては、ぜいたくなものではなかったかと思われるが、暑さを強調した挿入文であることに間違いはない。それにしても、四二段に

あてなるもの（上品なもの）薄色に白襲の汗衫（かざみ）。かりのこ。削（けず）り氷にあまづら入れて、あたらしき金鋺（かなまり）に入れたる。水晶（すいさう）の数珠（ずず）。

藤の花。梅の花に雪のふりかかりたる。いみじううつくしきちごの、いちごなどくひたる。

とあって、甘いかき氷とあたらしい金鋺の組合せが面白いが、これは一四八段に、「きよしと見ゆるもの　土器（かはらけ）。あたらしきかなまり。畳にさす薦（こも）。水を物に入るるすき影。」とあることと関係があり、ただぜいたくと言ってすまされない感情が込められていると見るべきであろう。

あかがねは一二三段（前述）に、しろがねは三〇二段（前述）のほに七五段に、「ありがたき（めったにない）もの舅（しうと）にほめらるる婿。また、姑（しうとめ）に思はるる嫁の君。毛のよく抜くるしろがねの毛抜。主そしらぬ従者（ずさ）。云々。」とある。そしてくろがねは一五三段に、「名おそろしきもの　あをふち。たにのほら。はたいた。くろがね。云々。」と書かれている。こがねは三七段に、「四月のつごもり、五月のついたちの頃ほひ、橘の葉のこくあをきに、花のいとしろう咲きたるが、雨うちふりたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花のなかよりこがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露にぬれたるあさぼらけの櫻におとらず。ほととぎすのよすがとさへおもへばにや、なほさらにいふべうもあらず。」と、柑橘の果実の比喩の形で出ている。

水晶については、四二段に上品なものとして、「水晶の数珠」が挙げられているが、そのほか比喩的に、既述の三〇二段に、「水晶の瀧」が、二三二段に、「月のいとあかきに、川を渡れば、牛のあゆむままに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。」と書かれている。一方、うつくしきものとして一五一段に、瑠璃の壷が挙げてある。さらに玉については一一九段の「秋ふかき庭の浅茅（あさぢ）に、露のいろいろ、玉のやうにて置きたる。」という比喩のほかに、二四四段に、蟻の習性をきわだたせて、玉に緒を通した、つぎの話がある。これは、「唐土（もろこし）の帝（みかど）、この國の帝を、いかで謀（はか）りてこの國討ちとらんとて、つねにこころみごとをし」てなぞなぞをしかけたが、ある中将がものの見事に解きあかしたものである。

ほどひさしくて、七曲（ななわた）にわだかまりたる玉の中通（なかとほ）りて左右に口あきたるがちひさきを奉りて、「これに緒通して賜わらん。この國にみなし侍る事なり」とて奉りたるに、「いみじからんものの上手（ず）、不用なり」と、そこらの上達部（かんだちめ）・殿上人、世にありとある人いふに、また行きて、「かくなん」といへば、「大きなる蟻をとらへて、二つばかりが腰にほそき絲をつけて、またそれに、いますこしふときをつけて、あなたの口に密（みち）を塗りて見よ」といひければ、さ申して、蟻を入れたるに、密の香をかぎて、まことにいととくあなたの口より出でにけり。さて、その絲の貫かれたるを遣（つかは）してけるのちになん、「なほ日の本の國はかしこかりけり」とて、のちにさる事もせざりける。

この中将をいみじき人におぼしめして、「なにわざをし、いかなる官（つかさ）・位（くらゐ）を賜ふべき」と仰せられければ、「さらに官もかうぶりも賜はらじ。ただ老いたる父（ちち）母のかくれうせて侍るたづねて、都に

住ますする事をゆるさせ給へ」と申しければ、「いみじうやすき事」
とてゆるされければ、よろづの人の親これを聞きてよろこぶ事いみ
じかりけり。中将は上達部・大臣になさせ給ひてなんありける。
さて、その人の神になりたるにやあらん、その神の御もとにまう
でたりける人に、夜現れてのたまへりける、
七曲にまがれる玉の緒をぬきてありとほしとは知らずやあるら
ん
とのたまへりける、と人の語りし。

既に述べた一九二段に、「こちたう赤き薄様を、唐撫子のいみじう咲きたるに結びつけて、云々」とあるが、薄様とは、薄く漉いた鳥の子紙である。着物とその色彩について、強い関心をもって、いろいろ詳細な記述があることは前に述べたが、紙とその色についても、多くのことが書かれている。「節（せち）は五月にしく月はなし。菖蒲（さうぶ）・蓬（よもぎ）などのかをりあひたる、いみじうをかし。九重（ここのへ）の御殿の上をはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかでわがもとにしげく葺かんと葺きわたしたる、なほいとめづらし。いつかは、ことをりにさはしたりし。」で始まる三九段の終りの部分に、「むらさきの紙に楝（あふち）の花、あをき紙に菖蒲の葉、ほそくまきてゆひ、また、しろき紙を、根してひきゆひたるもをかし。いとながき根（ね）を、文のなかに入れなどしたるを見る心地ども、えんなり。返りごと書かんといひあはせ、かたらふどちは見せかはしなどするも、いとをかし。云々。」とあって、同色の組合せを楽しんでいる。また、八八段に「めでたきもの」をとりあげているが、その終りの部分に、「花も絲も紙もすべて、なにもなにも、むらさきなるものはめでたくこそあれ。むらさきの花の中には、かきつばたぞすこしにくき。六位の宿直姿（とのゐすがた）のをかしきも、むらさきのゆゑなり。」と結んでいる。さらに八九段に、「なまめかしきもの」として、「薄様の草子。柳の萌え出でたるに、あをき薄様に書きたる文つけたる。・・・・・むらさきの紙を包（つつ）み文にて、房ながき藤につけたる。小忌（をみ）の君たちもいとなまめかし。」とある。二七七段の「・・・・・ただの紙のいと白うきよげなるに、よき筆、白き色紙、みちのくに紙など得つれば、こよなうなぐさみて、さはれ、かくてしばしも生きてありぬべかんめりとなむおぼゆる。云々。」に出てくるみちのくに紙は檀紙で奥州産のもののことである。みちのくに紙は、三六段と、二七六段にも出ている。平安時代には京都の平野神社や北野神社の近くの紙屋（かみや）川のほとりに、官設の紙屋院を置き、ここで楮（こうぞ）、穀（かじ）の木、雁皮などを原料として漉いた紙を紙屋紙（注8）といったが、需要量の増大もあって、古紙を使って漉き返しの薄墨色の紙（宿紙という）もつくっていた。一三六段に、「つとめて、蔵人所の紙屋紙（かうやがみ）ひき重ねて、云々」とある。このほか、三六段に、みちのくに紙を二つに折りたたんで懐に入れた畳紙（たたうがみ）のことや、香をたきしめた香色の薄様の香（かう）の紙（かみ）のことが書かれている。和紙は、中国の製法が（注9）、六一〇年に、高句麗王によって遣わされた僧曇徴によって彩色や墨とともに伝えられてからつくり出されたが、奈良時代に消費星が多くなり、平安時代には一層そうであった。そして、地方の諸国の生産する紙も良いものができるように

なって、紙屋紙に比肩するか、それを超えるに至る。紙屋院がつぐるようになった再生紙の薄墨紙は、写経の紙として使われ、それが流行したこともある（注10）という。

面白いのは、三〇四段に、「見ならひするもの　あくび。ちごども。」とある。あくびの伝染は昔も今も同じである。

一八八段から、一九〇段までに、病気のことが書いてある。それらを次に列記しよう。

病は　胸。もののけ。あしのけ。はては、ただそこはかとなくて物食はれぬ心地。

十八九ばかりの人の、髪いとうるはしくてたけばかりに、裾いとふさやかなる、いとよう肥えて、いみじう色しろう、顔愛敬（あいぎやう）づき、よしと見ゆるが、歯をいみじう病みて、額髪（ひたひがみ）もしとどに泣きぬらし、みだれかかるも知らず、おもてもいとあかくて、おさへてゐたるこそいとをかしけれ。

八月ばかりに、白き單（ひとへ）なよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑（しをん）の衣（きぬ）のいとあてやかなるをひきかけて、胸をいみじう病めば、友だちの女房など、数々來つつとぶらひ、外（と）のかたにも、わかやかなる君達（きんだち）あまた来て、「いといとほしきわざかな。例もかうや悩み給う」など、ことなしびにいふもあり。心かけたる人は、まことにいとほしと思ひなげき、人知れぬなかなどは、まして人目思ひて、寄るにも近くもえ寄らず、思ひなげきたるこそおかしけれ。いとうるはしう長き髪をひき結ひて、ものつくとて起きあがりたるけしきもらうたげなり。

上（うへ）にもきこしめして、御讀（みど）経の僧の聲よき賜はせたれば、几（き）帳ひきよせてするたり。ほどもなきせばさなれば、とぶらひ人あまたきて、経聞きなどするもかくれなきに、目をくばりて讀みゐたるこそ、罪や得（う）らむとおぼゆれ。

九八四年に、針博士の丹波康頼が、主として隋の巣元方の病源候論によって選述し、花山天皇に奏進した「医心方」が、現存するわが国最古の医書とされている（注11）が、果たして宮廷のなにびとあたりまで読まれていたのであろうか。

一千年も前の生活において、家をつくり、牛車をつくり、橋をかけ、船をつくり、暖房用や鍛冶用の炭を焼き、紙をつくるなどして、樹木を倒し、切り、燃焼し、森林を開き、道をつくり、居住地を設け（注12）、田畑とし、耕して米や豆などの食糧を生産した。平城京や平安京などのまちづくりには多くの木材を要したことであろう。村ができ、まちができ、都ができ、そして人が集り、人口が増え、食糧を含むエネルギーの消費が増すことになる（注13）。しかしそのことは、枕草子には何も書いてないし、またとりあげて書くべきことでもなかった。自然と生活をあるがままにめに入れ、こまやかに観察しつつ、自分の気持ちを込めて、「をかし」、「あはれなり」、「めでたし」などと結ぶのである。もちろ

ん、おそろしきもの、にくきもの、きたなきもの、心づきなきものなどのほかに、あてなるもの、きよしと見ゆるもの、ありがたきものなども、自分の気持ちをあらわす言葉としてとりあげているが、これらはどれも、その当時のこころのありさまを表現する言葉であって、自然に対しても、同じように使っているのであろう。そして、自然に対するこころの持ち方や、こころの通わし方が好ましいものであることが大切で、そうしたことが、おのずと生活の基盤にあったし、生活のリズムを生む力であったと言えるであろう。

第三章　徒然草における自然

一三三〇年頃に完成したとされる（注14）吉田兼好の徒然草の第十九段には、枕草子の一段と対比される日本の四季についての文章（注15）が、つぎのように書かれている。

折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ。

「もののあはれは秋こそまされ」と人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮き立つものは、春のけしきにこそあゝめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、墻根（かきね）の草萌え出づるころより、やや春ふかく、霞みわたりて、花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ、折しも、雨・風うちつづきて、心あわたゝしく散り過ぎぬ、青葉になりゆくまで、万に、ただ、心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ、梅の匂ひにぞ、古の事も、立ちかへり恋しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて、思ひ捨てがたきこと多し。

「灌仏の比（ころ）、祭の比、若葉の、梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月（さつき）、菖蒲（あやめ）ふく比、草苗とる比、水鶏（くひな）の叩くなど、心ぼそからぬかは。六月（みなづき）の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火（かやりび）ふすぶるも、あはれなり。六月祓（みなづきばらへ）、またをかし。

七夕祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁鳴きてくる比、萩の下葉色づくほど、早稲田（わさだ）刈り干すなど、とり集めたる事は、秋のみぞ多かる。また、野分の朝（あした）こそをかしけれ。言ひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにこと古（ふ）りにたれど、同じ事、また、いまさらに言はじとにもあらず。おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて、冬枯のけしきこそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀（みぎわ）の草に紅葉（もみぢ）の散り止りて、霜いと白うおける朝、遣水より烟（けぶり）の立つこそをかしけれ。年の暮れ果てて、人ごとに急ぎあへるころぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の寒けく澄める、廿日余りの空こそ、心ぼそきものなれ。御仏名（おぶつみやう）。荷前（のさき）の使立（つかひたち）つなどぞあはれにやんごとなき。公事（くじ）ども繁（しげ）く、春の急ぎにとり重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺（つゐな）より四方拝に続くこそ面白けれ。晦日（つごもり）の夜（よ）、いたう闇きに松どもともして、夜半（よなか）過ぐ

るまで、人の、門（かど）叩き、走りありきて、何事にかあらん、ことことしくのゝしりて、足を空に惑ふが、暁がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心ぼそけれ。亡（な）き人のくる夜とて魂（たま）祭るわざは、このごろ都にはなきを、東（あづま）のかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に変りたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路（おほぢ）のさま、松立てわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

季節の移ろいとともに、一年のいろいろの行事や生活のありさまが書いてあるが、それらは現在とほとんど変りがない。さらに、蚊遣火がくすぶっていたり、寒く（注16）なって遣水より水蒸気が上っていたり、大晦日から元旦にかけて、騒々しかったのが静かになるまちの様子など、七百年も前の文章と思えないほどである。

枕草子も和漢の書を参照していたが、それから三百年後の徒然草は、はるかに多くの内外の書や仏典を参照している（たとえば第十三段や第十四段からわかる）。その中には、枕草子も含まれている。枕草子の四〇、三七、六六、六七段にある、木や草や、それらの花についての文章を意識したか、第百三十九段に、つぎの一文がある。

家にありたき木は、松・桜。松は、五葉（ごえふ）もよし。花は、一重（ひとへ）なる、よし。八重桜は、奈良の都にのみありけるを、この比（ごろ）ぞ、世に多く成り侍（はんべ）るなる。吉野の花、左近の桜、皆、一重にてこそあれ。八重桜は異様（ことやう）のものなり。いとこちたく、ねぢけたり。植ゑずともありなん。遅桜、またすさまじ。虫の附きたるもむつかし。梅は、白き・薄紅梅一重なるが疾く（と）咲きたるも、重なりたる紅梅の匂ひめでたきも、皆をかし。遅き梅は、桜に咲き合ひて、覚え劣り、気圧（けお）されて、枝に萎（しぼ）みつきたる、心うし。「一重なるが、まづ咲きて、散りたるは、心疾（と）く、をかし」とて、京極入道中納言は、なほ、一重梅をなん、軒（のき）近く植ゑられたりける。京極の屋（や）の南向きに、今も二本侍るめり。柳、またをかし。卯月ばかりの若楓、すべて万の花・紅葉にもまさりてめでたきものなり。橘・桂、いづれも、木はもの古り、大きなる、よし。

草は、山吹・藤・杜若（かきつばた）・撫子。池には、蓮（はちす）。秋の草は、荻（おぎ）薄（すすき）・桔梗（きちかう）・萩（はぎ）・女郎花（をみなへし）・藤袴。紫苑（しをに）・吾木香（われもかう）・刈萱（かるかや）・竜胆（りんだう）・菊。

黄菊も。蔦・葛・朝顔。いづれも、いと高からず、さゝやかなる、墻（かき）に繁からぬ、よし。この外の、世に稀なるもの、唐めき（注17）たる名の聞きにくゝ花も見馴れぬなど、いとなつかしからず。

大方、何も珍らしく、ありがたき物は、よからぬ人のもて興ずる物なり。さやうのもの、なくてありなん。

ついでながら、食用植物に関して、枕草子の二二六段と二二七段には、田植と稲のことが書いてあるが、米のことは見当らない。また、一〇八段に、「それに、豆一盛り、やをらとりて、小障子（こさうじ）のうしろにて食ひければ、ひきあらはしてわらふこと限りなし。」とある。一方、徒然草には、第四十段の、米の類を食わずに栗をのみ食う娘の話、第六十段の、芋頭（いもがしら）を好む盛親僧都（じやうしんそうづ）の話、第六十八段の、「土大根（つちおほね）を万に

いみじき薬とて、朝ごとに二つづゝ焼きて食ひける」者の話、第六十九段の、豆を煮る音にまつわる話など、いろいろある。

自然現象に関して、月、露（注18）、雪（注19）、風・嵐、桜の開花時期のほかに、神無月（注20）のいわれや、夜についての第百九十一段の文、

「夜に入（い）りて、物の映えなし」といふ人、いと口をし。万のものの綺羅・飾り・色ふしも、夜のみこそめでたけれ。昼は、ことそぎおよすけたる姿にてもありなん。夜はきらゝかに、花やかなる装束（しやうぞく）、いとよし。人の気色（けしき）も、夜の火影（ほかげ）ぞ、よきはよく、物言ひたる声も、暗くて聞きたる、用意ある、心にくし。匂ひも、ものの音も、たゞ、夜ぞひときはめでたき。

さして殊（こと）なる事なき夜、うち更けて参れる人の、清げなるさましたる、いとよし。若きどち、心止（とど）めて見る人は、時をも分（わ）かぬものなれば、殊に、うち解けぬべき折節（おりふし）ぞ、褻（け）・晴（はれ）なくひきつくろはまほしき。よき男の、日暮れてゆするし、女も、夜更くる程に、すべりつゝ、鏡取りて、顔などつくろひて出づるこそ、をかしけれ。

があり、また第三十八段の、「財（たから）多ければ、身を守るにまどし。害を賈（か）ひ、累（わづらひ）を招く媒（なかだち）なり。身の後（のち）には、金（こがね）をして北斗を拄（さゝ）ふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚かなる人の目をよろこばしむる楽しみ、またあぢきなし。大きなる車、肥えたる馬、金玉（きんぎょく）の飾りも、心あらん人は、うたて、愚かなりとぞ見るべき。金（こがね）は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり。云々。」という文章に、北斗星を金でささえたとしても、そのわずらわしいことを述べている。枕草子には北斗星は出てこない。

枕草子にはなくて、徒然草にとりあげられた動物には、蛙（第十段）、猪（ゐ）のしし（第十四段）、狐（第二百十八、二百三十、二百三十五段）、象（第九段）がある。象については書物の上のことであろうが、「女の髪すぢを縒（よ）れる網には、大象もよく繋（つな）がれ、女のはける足駄（あしだ）にて作れる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞ言ひ伝へ侍る。自ら戒めて、恐るべく、慎むべきは、この惑ひなり。」の文がある。

また、鳥については、枕草子と同じく、鳶、烏、ほととぎす、雁、鶴がとりあげられているが、そのほかに、鷹（第六十六、百二十八百七十四段）、雉（第百十八段）、喚子鳥（郭公（カッコウ））・鵺（ぬえ）（第二百十段）梟（ふくろう）（第二百三十五段）がある。第二百三十五段をつぎに記す。

主（ぬし）ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入り来る事なし。主（あるじ）なき所には、道行人濫（みちゆきびとみだ）りに立ち入り、狐・梟やうの物も、人気（ひとげ）に塞（せ）かれねば、所得顔に入り棲み、木霊（こたま）など云ふ、けしからぬ形も現はるゝものなり。

また、鏡には、色・像（かたち）なき故に、万の影来りて映（うつ）る。鏡に色像あらましかば、映らざらまし。

虚空（こくう）よく物を容（い）る。我等が心に念々のほしきまゝに来り浮ぶも、心といふもののなきにやあらん。心に主（ぬし）あらましかば、胸の中（うち）に、若干（そこばく）の事は入り来らざらまし。

第七段に、「命（いのち）あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろうの夕（ゆふ）べを待ち、夏の蝉の春秋（はるあき）を知らぬもあるぞかし。つくづくと

一年（ひととせ）を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年（ちとせ）を過（すぐ）すとも、一夜（ひとよ）の夢の心地（ここち）こそせめ。住み果てぬ世にみにくき姿を待ち得て、何かはせん。命長ければ辱（はぢ）多し。長くとも、四十（よそぢ）に（注21）足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。云々。」とある。

第七十四段に、「蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ、南北に走（わし）る人、高きあり、賤しきあり。老いたるあり、若きあり。行く所あり、帰る家あり。夕に寝（い）ねて、朝（あした）に起（お）く。いとなむ所何事ぞや。生（しょう）を貪（むさぼ）り、利を求めて、止む時なし。

身を養ひて、何事をか待つ。期（ご）する処、たゞ、老（おい）と死とにあり。その来る事速かにして、念々の間（あひだ）に止まらず。これを待つ間、何の楽しびかあらん。惑へる者は、これを恐れず。名利に溺れて、先途（せんど）の近き事を顧みねばなり。愚かなる人は、また、これを悲しぶ。常住ならんことを思ひて、変化（へんげ）の理（ことわり）を知らねばなり。」とある。

また、第九十七段に、「その物に付きて、その物をつひやし損（そこな）ふ物、数を知らずあり。身に虱（しらみ）あり。家に鼠あり。国に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。」とある。

以上の虫が、徒然草にとりあげられているものであるが、枕草子のように叙情的な文章の中に出てくるということはない。このことは徒然草において、何事によらず一般的に見られるもので、どちらかというと、道理を説くことを旨とした文章が多く、出家して世を捨てた作者の、面目躍如たるものがある。

枕草子には、貝のほかに魚のことは何も出てこないが、徒然草には、貝（第三十四、百三十九段）のほかに、鯉（第百十八、二百三十一段）、鮎（第百八十二段）、鮭（第百八十二段）、鰹（第百十九段）、飽・海老（第二百十六段）が出てくる。食用としてのこれらの水産物がとりあげられているのは、やはり枕草子以後三百年も経過しているからであろうか。第百十九段に

鎌倉の海に、鰹と言ふ魚（うを）は、かの境ひには、さうなきものにて、この比（ごろ）もてなすものなり。それも、鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚、己れら若かりし世までは、はか〴〵しき人の前へ出づる事侍らざりき。頭（かしら）は、下部（しもべ）も食はず、切りて捨て侍りしものなり」と申しき。

かやうの物も、世の末になれば、上（かみ）ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。

とある。なお、第二百三十一段には、鯉を料理する庖丁者の話、また、第百三十六段には、「しほ」という漢字についての話が出てきている。

さて、第百二十二段と、第百二十三段をつぎに列記しよう。

人の才能は、文（ふみ）明らかにして、聖（ひじり）の教（をしへ）を知れるを第一とす。次には、手書く事、むねとする事はなくとも、これを習ふべし。学問に便（たよ）りあらんためなり。次に、医術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝の務（つとめ）も、医にあらずはあるべからず。次に、弓射（ゆみい）、馬に乗る事、六芸（りくげい）に出だせり。必ずこれをうかゞふべし。文・武・医の道、まことに、欠けてはあるべからず。これを学ばんをば、いたづらなる人といふべからず。次に、食は、人の天なり。よく味はひを調へ

知れる人、大きなる徳とすべし。次に細工（さいく）、万に要多し。
この外の事ども、多能は君子の恥づる処なり。詩歌に巧みに、糸竹に妙なるは幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世には、これをもちて世を治むる事、漸くおろかなるに似たり。金（こがね）はすぐれたれども、鉄（くろがね）の益（やく）多きに及（し）かざるが如し。

無益（むやく）のことをなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事（ひがごと）する人とも言ふべし。国のため、君のために、止むことを得ずして為すべき事多し。その余りの暇（いとま）、幾ばくならず。思ふべし、人の身に止むことを得ずして営む所、第一に食ふ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。餓えず、寒からず、風雨に侵されずして、閑かに過（すぐ）すを楽（たの）しびとす。ただし、人皆病（やまひ）病に冒（をか）されぬれば、その愁忍び難し。医療を忘るべからず。薬を加へて、四つの事、求め得ざるを貧しとす。この四つ、欠けざるを富めりとす。この四つの外（ほか）を求め営むを奢りとす。四つの事倹約ならば、誰の人か足らずとせん。

これら二つの文は、現在のわれわれにとってもあてはまる、大切なことである。それにしても興味のあることは、「医術を習ふべし」、「文・武・医の道、まことに欠けてはあるべからず」、「医療を忘るべからず」、「人皆病あり」、「薬を加へて、四つの事、求め得ざるを貧しとす。この四つ、欠けざるを富めりとす」と、医術の大切なことを強調していることと、「食は人の天なり。よく味はひ調へ知れる人、大きなる徳とすべし」、「人の身に止むことを得ずして営む所、第一に食ふ物」と、食事の大切さと調味の大事なことを述べていることである。既に述べた第七段と第七十四段に、「死」や、「老と死」のことが出ているが、病気・医術・医師・薬に関する文は、第四十二、四十七、五十三、八十四、百三、百十七、百二十、百二十九、百三十一、百三十六、百四十七、百四十八、百五十五（注22）、百七十一、二百十七、二百二十四、二百四十一段にあるように、多数である。病に臥す人を叙情的に書いた枕草子とは異なる点である。

第百十七段に

友とするに悪（わろ）き者、七つあり。一つには、高く、やんごとなき人。二つには、若き人。三つには、病なく、身強き人。四つには、酒を好む人。五つには、たけく、勇める兵（つはもの）。六つには、虚言（そらごと）する人。七つには、欲深き人。

よき友、三つあり。一つには、物くるゝ友。二つには医師（くすし）。三つには智恵ある友。

とある。また、第百二十段に

唐（から）の物は、薬の外は、みななくとも事欠くまじき。書（ふみ）どもは、この国に多く広まりぬれば、書きも写してん。唐土舟（もろこしぶね）の、たやすからぬ道に、無用の物どものみ取り積みて、所狭（ところせ）く渡しもて来る、いと愚かなり。

「遠き物を宝とせず」とも、また、「得難き貨（たから）を貴（たふと）まず」とも、

文（ふみ）にも侍（はんべ）るとかや。

とあって、唐の薬の輸入にも言及している。一方、食事や調味をとりあげているのは、枕草子と違って、既に述べたように、食用の植物や、魚貝、さらに庖丁者について述べていることと関係があると思われる。そして第二百二十四段に、

陰陽師有宗（おんやうじありむね）入道、鎌倉より上りて、尋ねまうで来りしが、先づさし入りて、「この庭のいたづらに広きこと、あさましく、あるべからぬ事なり。道を知る者は、植うる事を努む。細道一つ残して、皆、畠に作り給へ」と諫め侍りき。

まことに、少しの地をもいたづらに置かんことは、益（やく）なき事なり。食ふ物・薬種などを植ゑ置くべし。

という一文を書いて、食う物や、薬種を植えることを奨励している。

さて、枕草子には、技術に関することは比較的すくなかったが、徒然草には、既に述べた第百二十二段に、「細工、万に要多し」とあり、さらにつぎのような、技術に関する文章が見られる。夏は暑く、冬は寒い環境の中での住居について、枕草子の七六段に対応して、第五十五段に

家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬は、いかなる所にも住まる。暑き比（ころ）わろき住居（すまひ）は、堪へ難き事なり。

深き水は、涼しげなし。浅くて流れたる、遥かに涼し。細（こま）かなる物を見るに、遣戸（やりど）は、蔀（しとみ）の間よりも明（あか）し。天井の高きは、冬寒く、燈（ともしび）暗し。造作（ぞうさく）は、用なき所を作りたる、見るも面白く、万の用にも立ちてよしとぞ、人の定め合ひ侍りし。

とある。この方が、建築上の指針を、より具体的に与えていると言える。風通りが良く、天井の高い家の方が、夏は涼しい。しかし、冬は寒い。それで、冬は、着物を沢山着て、火鉢で暖をとる。部屋全体を暖めることなど、所詮むりだし、そのようなことは考えもしなかったろう。第二百十三段に、

御前（ごぜん）の火炉（くわろ）に火を置く時は、火箸して挟（はさ）む事なし。土器（かはらけ）より直（ただ）ちに移すべし。されば、転（ころ）び落ちぬやうに心得て、炭を積むべきなり。

八幡（やわた）の御幸（ごかう）に、供奉（ぐぶ）の人、浄衣（じやうえ）を着て、手にて炭をさゝれければ、或有職の人、「白き物を着たる日は、火箸を用いる、苦しからず」と申されけり。

とある。火炉は炭火を用いて暖をとる火鉢のことである。また、第五十一段に、

亀山殿（かめやまどの）の御池（みいけ）に大井川（おほゐ）の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車（みづぐるま）を作らせられけり。多くの銭（あし）を給ひて、数日（すじつ）に営み出だして、掛けたりけるに、大方廻（おほかためぐ）らざりければ、とかく直（なほ）しけれども、終に廻（まは）らで、いたづらに立てりけり。

さて、宇治の里人（さとびと）を召して、こしらへさせられければやすらかに結ひて参らせたりけるが思ふやうに廻（めぐ）りて、水を汲み入（い）るゝ事めでたかりけり。

万に、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。

とあって、技術者に対する教訓のような話である。大井川は、京都の嵐山のところを流れる保津川で、亀山殿は川の北、現在の天竜寺のところにあった。その頃の高低差がどの程度か知らないが、大井川の水で水車を廻転させながら、水を汲み上げてから、水路を通して池へ流し入れたと見るべきであろう。第百七十七段に、

鎌倉中書王（ちゅうしょわう）にて御鞠（おんまり）ありけるに、雨降りて後、未だ庭の乾かざりければ、いかゞせんと沙汰ありけるに、佐々木隠岐入道、鋸の屑を車に積みて、多く奉りたりければ、一庭（ひとにわ）に敷かれて、泥土の煩（わずら）いひなかりけり。「取り溜めけん用意、有難し」と、人感じ合へりけり。

この事を或者の語り出でたりしに、吉田中納言の、「乾き砂子（すなご）の用意やはなかりける」とのたまひたりしかば、恥かしかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しく、異様（ことやう）の事なり。庭の儀を奉行する人、乾き砂子を設くるは、故実（こしつ）なりとぞ。

ところで、枕草子には全然書かれていない「塵塚（ちりつか）」についての一文が、第七十二段にある。

賤しげなる物、居たるあたりに調度の多き。硯に筆の多き。持仏堂に仏の多き。前栽（せんざい）に石・草木の多き。家の内に子孫（こうまご）の多き。人にあひて詞（ことば）の多き。願文（ぐわんもん）に作善（さぜん）多く書き載せたる。

多くて見苦しからぬは、文車（ふぐるま）の文（ふみ）。塵塚の塵。

塵塚の塵が多くて見苦しくないというのは、どういう意味であろうか。塵塚に塵が多いのは当然だということであろうか。それにしても、塵塚というものが文章に現われるのは、生活の中で、塵となるものが多くなってきたという証拠であろう。それは、三百年以上の経過による生活の変化に基づくものかもしれない。第二十二段の文章をつぎに記して、この章を終えることにする。

何事も、古き世のみぞ慕はしき。今様（いまよう）は、無下（むげ）にいやしくこそなりゆくめれ。かの木の道の匠（たくみ）の造れる、うつくしき器物（うつわもの）も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。

文の詞などぞ、昔の反古（ほうご）どもはいみじき。ただ言ふ言葉も、口をしうこそなりもてゆくなれ。古は、「車もたげよ」、「火かゝげよ」とこそ言ひしを、今様の人は、「もてあげよ」、「かきあげよ」と言う。「主殿寮人数立（とのもれうにんじゆた）て」と言ふべきを、「たちあかししろくせよ」と言ひ、最勝講（さいしようこう）の御聴聞所（みちゃうもんじょ）なるをば、「御講の廬（ごかうろ）」とこそ言ふを、「講廬」と言う。口をしとぞ、古き人は仰せられし。

第四章　結　論

枕草子と徒然草に書かれている自然をとりあげ、自然を見つめる「め」や、自然に対する「こころ」について考察してきたが、どちらも、自然と生活に注目して、観察・描写し、自分の気持ちゃ考えを込めた文章としている。そして、四季の移り変りのなかで、自然を見て感動し、また自然に対して心を通わせることによって、生活のリズムが生れ、心豊かな生活がおくれる。年間の行事も、その時期の自然環

境のもとでこそ意義あるものとなり、いきいきしてくる。

どちらかと言うと、枕草子の方が叙情的であるが、徒然草にも叙情的な文もある。しかし、自然をとらえて道理を説き、命あるものに老や死を見すえて、人の生き方をさとす。四十才を過ぎてからの生き方についても言及している。そして、「食・住・衣・薬の四つの欠けざるを富めり」とし、食事と調味が大事であり、さらに医術の大切なことと、道を知ることは、技術者のみならず、よろずに尊いことを教えるのである。唐土からは薬だけを輸入し、またすこしの空地にも、食う物や薬種を植えることを奨励する。興味のあることは、塵塚の塵の多いことは見苦しくないと言っていることである。

枕草子と徒然草を読むと、作者の履歴の違いと、三百年の時の流れを感じる一方、自然についての日本人の「め」や「こころ」に何らの変りがなく、しかもそれが現在までずっと続いていて、日本文化の基盤にもなっていると言うことができる。このことが、生徒や学生の学習によって理解されるならば、日本文化の伝統のもとで、自然を見つめ、自然の息吹きを感じ、自然を愛し、自然をおそれ、自然を理解し、自然を大切にし、そして自然と人間のかかわりを考えることによって、あらたな科学技術の創造と発展に寄与しようという意欲を持った青少年が沢山育つことが期待できる。

注

1 「日本文化総合年表」岩波書店、一九九〇年三月。なお、この年表によると、九九九年頃、インドの数学者シューリンダラが零の重要性を発見したという。

2 **岩波書店刊「日本古典文学大系十九、枕草子　紫式部日記」昭和四七年十二月による。**なおルビは、必要に応じて付した。以下同じ。注釈も参照した。

3 新村出編「広辞苑・第四版」岩波書店、一九九一年十一月。

4 平成六年四月一日に高等学校の第一学年に入学した生徒から適用される、新しい高等学校学習指導要領によると、国語科の科目には、国語Ⅰ（4）、国語Ⅱ（4）、国語表現（2）、現代文（4）、現代語（2）、古典Ⅰ（3）、古典Ⅱ（3）、古典講読（2）の八科目があり、生徒の特性、進路等に応じた指導を充実できるようにしているが、そのうち国語Ⅰが必修科目である。一方、高専教育方法改善専門委員会国語科部会の報告書（一九九二、七）「高専の国語教育」によると、「古典教育の充実」の項を設けて論じている。

5 徒然草の第百七十五段に、「世には、心得ぬ事の多きなり。ともある毎には、まづ、酒を勧めて、強ひ飲ませたるを興とする事、如何なる故とも心得ず。云々。」とある。

6 四〇段に、「白樫といふものは、まいて深山木のなかにもいとけどほくて、三位・二位のうへのきぬ染むるをりばかりこそ、葉をだに人の見るめれば、をかしきこと、めでたきことにとりいづべくもあらねど、いづくともなく雪のふりおきたるに見まが

へられ、素戔嗚尊出雲の国におはしける御ことを思ひて、人丸がよみたる歌などを思ふに、いみじくあはれなり。云々。」とある。

7 蠅については「蠅（はえ）こそにくき物のうちにいれつべく、愛敬なき物はあれ。人々しう、かたきなどにすべきもののおほきさにはあらねど、秋など、ただよろづの物にゐ、顔などに、ぬれ足してゐるなどよ。人の名につきたる、いとうとまし。」とある。また蟻については、「蟻は、いとにくけれど、かろびいみじうて水の上などを、ただあゆみにあゆみありくこそをかしけれ。」とある。

8 「新編日本史辞典」、京大日本史辞典編纂会編、東京創元社、平成二年八月。

9 「日本文化総合年表」（前出）による。

10 町田誠之「紙と日本文化」日本放送出版協会（ＮＨＫブックス）、平成元年十一月。

11 「新編日本史辞典」（前出）による。

12 田植と稲のことは、二二六・二二七段に、豆のことは一〇八段に出てくる。

13 岐美格、人類はエネルギーをどのように利用したか、メカライフ、十五号、一九八九、三、日本機械学会。

14 「日本文化総合年表」（前出）による、なお、この年表によると、一二七一年にマルコポーロがイタリアを出発して東方旅行に出かけた。一二九二年に、ダンテの「新生」ができた。一二九八年に、マルコポーロの「東方見聞録」ができた。そして一三一三年にダンテの「神曲」ができたという。

15 **「新訂徒然草」西尾実・安良岡康作校注、岩波書店（岩波文庫）、一九八七年八月による。**なお、ルビは必要に応じて付した。以下同じ。注釈も参照した。

16 自然現象についての観察のこまやかさは、つぎの第百五段の文にも見られる。「北の屋陰に消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轅（ながえ）も、霜いたくきらめきて、有明の月、さやかなれども、隈なくはあらぬに、人離れなる御堂の廊に、なみ〳〵にはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、尽きすまじけれ。云々。」

17 「新訂徒然草」（前出）の注釈によると、「たとえば牡丹・芭蕉・薔薇・蘭など」という。枕草子の四〇段には、「姿なけれど椶櫚（すろ）の木、唐めきて、わるき家の物とは見えず。」とある。

18 たとえば第四十四段に、「心のまゝに茂れる秋の野らは、置き余る露に埋もれて、虫の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲の往来も速き心地して、月の晴れ曇る事定め難し。」とある。

19 たとえば第百六十六段に、「人間の、営み合へるわざを見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀・珠玉の飾りを営み堂を建てんとするに似たり。その構へを待ちて、よく安置して

20

んや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること雪の如くなるうちに、営み待つこと甚だ多し。」とある。

第二百二段「十月を神無月（かみなづき）と言ひて、神事に憚るべきよしは、記したる物なし。本文（もとふみ）も見えず。但し、当月、諸社の祭なき故に、この名あるか。

この月、万の神達、太神宮に集り給ふなど言ふ説あれども、その本説なし。さる事ならば、伊勢には殊に祭月とすべきに、その例もなし。十月、諸社の行幸、その例も多し。但し、多くは不吉の例なり。」

21

第百十三段に、「四十にも余りぬる人の、色めきたる方（かた）、おのづから忍びてあらんは、いかゞはせん、言（こと）に打ち出でて、男・女の事、人の上をも言ひ戯（たはぶ）るゝこそ、にげなく、見苦しけれ。大方、聞きにくゝ、見苦しき事、老人（おいびと）の、若き人に交りて、興あらんと物言ひゐたる。数ならぬ身にて、世の覚えある人を隔てなきさまに言ひたる。貧しき所に、酒宴好み、客人（まらうど）に餐応（あるじ）せんときらめきたる。」、第百四十八段に、「四十以後の人、身に灸を加へて、三里を焼かざれば、上気（じやうき）の事あり。必ず灸すべし。」とある。

22

「春暮れて後、夏になり、夏果てて、秋の来るにあらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既に秋は通ひ、秋は即ち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅も蕾みぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌（きざ）しつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる気、下に設けたる故に、待ちとる序（ついで）甚だ速し。生（しょう）・老（らう）・病・死の移り来る事、またこれに過ぎたり。四季は、なほ、定まれる序あり。死期（しご）は序を待たず。死は、前よりしも来らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟（ひかた）遥かなれども、磯より潮（しほ）の滴つるが如し。」

（平成四年九月三日受理）

追加の注（京機会による）

著者注の 2 と 15 を太字にした。古典の場合は諸本があるので、どれを底本にするかで、文章が全く異なることが少なくないので注意されたい。

なお、岐美先生は、枕草子の段には「第」を付けず、徒然草の段には「第」を付けて、区別しておられるようである。

（令和三年八月六日）